著名人が語る
「私のリビング・ウイル」

TBSラジオ・ラジオ大阪「MyLIFE! MyCHOICE!!」（日本尊厳死協会提供）から

第4弾

**2022年秋から毎週、著名人にご登場いただいて、
人生の最終段階や死生観などについて30分近く、
この9月末までラジオでお話しいただいてきました。
今号は、その第4弾として、俳優で画家の片岡鶴太郎さん、
お笑いタレントの関根勤さんのお話を掲載いたします。
聞き手は元TBSアナウンサーで現在フリーアナウンサーの安東弘樹さん。**

（構成／会報編集・郡司　武）

【インタビュー】俳優・画家・お笑いタレント

片岡鶴太郎さん

「午睡のように他界したい」

かたおか・つるたろう

1954年、東京生まれ。都立竹台高校卒業。高校3年の時に演劇部部長。小さいころから父に連れられて寄席や演芸場に通い、10歳の時に動物の物真似でフジテレビの「しろうと寄席」に出演。72年、声帯模写の片岡鶴八に弟子入りし声帯模写で舞台に出演。松山・道後温泉で劇団に所属し司会や物真似の経験も。81年、フジテレビの「オレたちひょうきん族」にレギュラー出演し全国区の人気に。その後、テレビ、映画などで幅広く活躍。88年にプロボクシングのライセンス取得。95年に絵の初の個展を開催。98年、群馬県草津に片岡鶴太郎美術館を開館。2015年、書の芥川賞といわれる「手島右卿賞」を受賞。17年、インド政府よりヨガインストラクターの称号を授与される。

安東　俳優、画家、ヨガのインストラクター、プロボクサー、お笑いタレントと多彩な鶴太郎さんですが、肩書はどれがよろしいんでしょうか。

片岡　肩書は何でもいいんです。重きを置いてませんから。仕事によって言われるままに。「鶴ちゃん」でいいですよ。

安東　いやあ「鶴ちゃん」はちょっと呼べないですねぇ…。子どもの頃にテレビ見てた頃は「鶴ちゃん」だったんですけど、今のこのお姿は、もはや仙人のようで…。

片岡　この風体ですから、「鶴ちゃん」ではなくなりますかね。

「刹那的な毎日に『オレ、やばいな』と…」

安東　もともと、この世界に入られたきっかけは何だったんですか。

片岡　高校時代に演劇をやってましたけど、きっかけは父親ですかね。日暮里生まれで寄席好きで、上野や浅草の演芸場に、子どもの頃によく連れていってもらいました。そこで芸人さんの世界に憧れみたいなものが生まれたんですかね。将来、お笑いとか役者をやっていきたいなあ、と漠然と思っていました。それで高校を出てすぐに片岡鶴八師匠に弟子入りしました。声帯模写芸人でした。当時はコント55号やドリフターズが全盛で渥美清さんもいました。喜劇もシリアスな芝居もできる渥美さんが好きでしたから、そういう芸人になりたいなと思ってました。

安東　見事に体現されましたよね。

片岡　小学生の頃にはすでに心に決めていて、卒業文集に「物まねをやって芸能界に入りたいです」と書いてるんですよ。

安東　ははあ、やっぱり目標は文字に書いたり声に出したりするもんですね。

片岡　そう思いますね。早くから進路についての希望や目標はしっかりもってました。高校出て師匠のところに3年いて、コントのグループに入り、22、3歳の頃にピン芸人になり、寄席に出るオーディションに受かって23、4歳でスタートしました。

安東　どんなネタでオーディションを受けたんですか。

片岡　10分以内の声帯模写。漫談をやり物まねをするという…。20人くらい受けて2人受かったんです。

浅草松竹演芸場が出発でした。私がトップバッターで次がツービート。ビートたけしさんとそこで出会うんです。

安東　ほおーっ、豪華な。そこから「オレたちひょうきん族」とか「笑っていいとも」でブレイクし「鶴ちゃん」の時代が来るわけですね。ものすごく忙しかったでしょ。

片岡　忙しかったですね。レギュラー8本から9本ありましたかね。

安東　そんな中でボクサーのプロテストを受けたんですよね。どんな心境からなんですか。

片岡　25、6歳からテレビに出始めて6、7年。32歳でしたね。忙しい

んですけど刹那的な毎日で、これから10年、20年過ごしていくと「オレ、やばいな」と思ったんです。消耗するだけで、なんのインプットもないと…。

安東　インプットがなく、出すばっかりと思ったわけですね。

片岡　31歳の時に「男女7人夏物語」というテレビドラマがあり、役者としてやれるかな、と思ったんです。一方でバラエティーも続けていましたから、役者かバラエティーか、どこかで自分がケジメをつけないといけないと…。

安東　なるほど。自分でケジメですか。

「午後11時起き、がこの12年のルーティン」

片岡　子どもの頃からボクシングも好きでして。でも忙しくてジムに通うなんてできなかったんですが、ボクシングのライセンスが33歳までだったもので、32歳の時にラストチャンスにかけ、1年間で秘密トレーニングをしてライセンスを取りました。ライセンスを持って役者の世界に行きたかったんです。

安東　ううーん。そうでしたか。

片岡　1年間で15kgぐらい絞りました。

安東　ボクサーになりたいというより、役者の礎を作るためにということだったんですか。

片岡　それもありましたが、ボクサーの称号はどうしても欲しかった。

安東　そしてさらにヨガですが、これは？

片岡　まさか自分がヨガをやるなんて思ってなかった。「瞑想がいい」とはずっと聞いていたので、そんないいのか、瞑想で自分はどう変わるのか客観的に見てみたいな、人体実験してみようと思ったんです。

安東　ほおー。それには指導を受けないといけませんよね。

片岡　ちゃんとした人に指導してもらわないとだめですよね。それで探していたら、なんと俳優の秋野大作さんも瞑想をしていて、マスターを紹介してくれたんです。

安東　そうでしたか。

片岡　そしたらマスターから「瞑想だけやるわけにはいかないんです。瞑想はヨガの最後のブロックになります」と言われたんです。

安東　それでヨガの道に入ったわけですか。今やインストラクターですよね。それも一番難しい。

片岡　インドのモディ首相からもらったんです（笑い）。インド政府公認のプロフェッショナルヨガ検定レベル1というもので。

安東　もはや鶴太郎さんがマスターで、指導することもできるわけですね。

「出会う者は必ず別れる定めにあるという『会者定離』、まさにそれだと思います」

「今までの自分がイヤになり、それを否定したかった」という理由でボクサーのテストを受験したという

片岡　そうですけど、指導などはいっさいしていません。

安東　ヨガで、実際、どう変わりましたか。

片岡　ヨガを始めて12年。1日たりともイヤな朝を迎えたことがないです。

安東　ええーっ。ちょっと待ってください。それはどういう意味ですか。

片岡　肉体を整えて、肉体から精神にもっていって瞑想で終えるんですが、全部で5時間くらいかかるんですよ。

安東　はあーっ？毎日5時間ですか。

片岡　だから午後11時起き、というのが、この12年、私のルーティンになってます。1日も休んでいません。寝るのは午後6時くらいですかね。

安東　はあーっ？　現代人とはまさに逆ですね。だからオーラが違うというか。健康という言葉では表せない、もっと上の状態。「清浄」ともいうのか…。

（上）鶴太郎さんに大きな影響を与えた父・忠雄さんと。（左）沖縄の三線（さんしん）を奏でる。まさに多芸多才。

「亡くなってから余計近くにいる感じ」

安東　これまで辛い別れも経験されておりますよね。一昨年にお父さまを亡くされました。

片岡　父は私にとっては、この仕事を選ぶきっかけを作ってくれた人です。寄席に連れていってもらって、帰ってくると、覚えていた前座の話なんかを、コタツの上に座布団敷いて「まんじゅう怖いというお笑いを一つ…」なんてやってました。するとそれに父親は目を細めてるんですよね。そうか、こういうことをすると父親は喜ぶんだ、こういう仕事を自分の生業にできたらいいな、そう思わせてくれたのは父親でしたね。

安東　今の鶴太郎さんを生んだわけですよね。

片岡　やがて、テレビに出ている姿を一番喜んでくれていたのも父親でした。

安東　喪失感は大変でしたか。

片岡　そうですね。でもよく食事も一緒にしましたし、草津に美術館（片岡鶴太郎美術館）ができてからは、両親と一緒に草津に行って酒を酌み交わしたり、いろんな話をしてましたから、あまり後悔といった気持ちはないですね。

安東　きちんと向き合えたということですね。

片岡　父親の死に関して言うと、「会者定離（えしゃじょうり）」という仏教の言葉を常に思っていて、まさにそれだと思います。出会う者は必ず別れる定めにある、ということ。会うは別れの始まりである、ですよね。ですから、老いた父親と会った時には「これが最後かもしれない」という思いで、後姿を見送っていましたね。

安東　鶴太郎さんのなかでは覚悟は常にあったということですね。

片岡　なんか亡くなってから、余計近くにいる感じがしますね。胸の中に常に「気配」があるといいますか。

安東　なるほど。鶴太郎さんの最後のイメージもそんな感じでしょうか。

片岡　午睡（昼寝）のように他界したい、というのが私の希望です。それまで、この肉体と精神・魂を思いっきり輝かして他界したいと思っています。現役のまま、仕事をしながら亡くなりたい。

安東　今日は、ほんとに貴重なお話をありがとうございました。

【インタビュー】モノマネ・お笑いタレント・司会

関根 勤さん

「モノマネはやったもん勝ちなんです」

安東　関根勤さんの「人生の歩き方」についてお聞きしていきたいと思います。東京の港区ご出身なんですね。

関根　そうなんですが、この前、ユーチューブ見てたら「港区っぽくない芸能人」の2位になってました。

安東　ハハハ、それで1位は誰なんですか。

関根　なんとデビ夫人。デビ夫人はもっと派手なところに住んでると思われたんじゃないですかね。

安東　ハハハ。それで、関根さんはどんな少年時代でしたか。

関根　「超末っ子」でした。母親も末っ子で父親は一人っ子。親の寵愛を受けて育ってきた両親のその末っ子だから超末っ子。14歳上の兄、9歳上の姉、7歳上の兄の4人きょうだいの中で、僕だけ子ども。だから「超あまあま」で育ちました。

安東　それが関根さんの「人を明るくする性格」を形作ったんでしょうね。

関根　いっぱい愛されて育ったので、人を愛するエネルギーはあるんですよ(胸を張る)。妻を愛して愛して…。しかし妻は長女だから「もう、そんなに要らない!!」って言って。

安東　ハハハ。愛の一方通行って話ですね。その話、以前もうかがいました。

関根　それで今は、とうとう通行禁止になってしまいました。

安東　ハハハ。通行禁止ね。可笑しい。

関根　娘(タレントの関根麻里さん)もバンバン愛したし、今は8歳と4歳の孫が可愛くて可愛くて仕方ないですね。お笑い界の若手も、同じように可愛いですね。

「お笑いは、マイナスの感情をリセット」

安東　お笑いの世界に入ったきっかけは?

関根　小学校2年の時に、わがままで給食を食べられなかったんですが、その時に食べ物のない戦前・戦中を経験してきた長野出身の女の先生に「先生、この給食、捨ててもいいですか」って聞いたんです。

安東　ほおーっ、なんと。

関根　長野って日本で一番食べ物を大事にする県らしいです。そしたら先生、烈火のごとく怒りましてね。「何言ってんですかぁー」って。その先生は5年まで担任でしたから、4年間、食べられない給食をただじっと見つめていました。地獄の4年間でした。

安東　ええっー。辛いんでしょうけれど、関根さんが言うと、どこか可笑しくて…。

関根　それを救ってくれたのがテレビのお笑い番組でした。お笑いはマイナスの感情をリセットしてくれるんですよ。それでお笑いの人を尊敬しちゃった。クレージーキャッツさんとかコント55号さんとか。給食を食べられていたら、あそこまでお笑いにのめり込まなかったかも。

安東　そうなると、長野出身の先生はある意味、恩人ですね。

関根　ほんと、そうなんですよ。70年生きてきて、あの4年ほど苦しい時期ないですもの。ハハハ。

安東　辛さのピークだったわけですか。そんな、ハハハ、可笑しい。それでテレビに出るようになったのは?

関根　大学時代、ストリートミュージシャンみたいに、5人でいろんなところに行ってお笑い活動をやってたんですが、21歳で解散し、テレビの「ぎんざNOW!」の「しろうとコメディアン道場」に出たんです。そこでジャイアント馬場さんのネタとかをやり、5週連続勝ち抜いて初代チャンピオンになり、その時審査員だった浅井企画の浅井良二社長にスカウトされたんです。

安東　浅井社長から、どんな言葉を言われたんですか。

関根　僕のような、クラスの男しか笑わせられないようなのは芸能界で通用しないと思いますって言ったんですが、そしたら社長は「いや、コント55号を育てた浅井が君の才能を保証する」って言ってくれたんです。

安東　うーん、うーん。そうですか。

関根　そう言われて、もう舞い上がっちゃって。「お願いしますッ」って言っちゃいました。そして番組のアシスタントになっちゃいました、いきなり。

「とっさにペリー提督のモノマネネタが浮かび…」

安東　モノマネの関根さんですが、ネタは変わってきてますよね。

関根　僕のやるモノマネは年寄りの人が多いんで、20歳以下の若いZ世代の人たちにはわからないんですよ。長嶋茂雄さんもジャイアント馬場さんも知らない。大滝秀治さんの「お前の話はつまらんっ!!」って言っても知らないんです。

安東　たしかに。そうですよね。

関根　じゃあ、これからどうしよう、となった時に、とっさに、教科書のペリー提督ってどうしゃべるの?って話になり、勢いで「くにをあけなさーい」っていうネタが浮かんできたんです。

安東　勢いでしたか。

関根　歴史上の人物の声は誰も知らないわけですから、マネはやったもん勝ちなんですよ。

安東　ハハハ。存在は授業でみんな知ってますもんね。

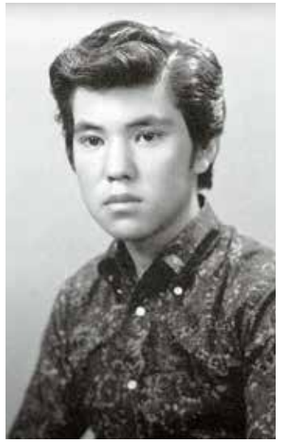
関根　そうなんです。伊能忠敬さんは54歳で日本を回って測量したんですが、そのオファーを受けた時のマネは「ヒザが持つかな」。

安東　可笑しい。やっぱり、浅井社長の目は確かでしたね。

関根　6年前に亡くなりましたが、まさに第2の父でした。シアターなどでの仕事があると来てくれていたので、今でも「これ社長に見せたかったなあ」「どう言ってくれるかなあ」と思ったりします。

安東　ところで関根さんも今年71歳ですよね。若々しいですが、ご自身のフィナーレを考えることはありますか。

「放送を終えて、『いやあ、皆さん、また来週』と言いながら、そのまま逝きたい」



(上)「あまあまで育てられました」という関根さんとお母さま。(下)「ラビット関根」時代の関根さん

せきね・つとむ

1953年、東京生まれ。旧芸名はラビット関根。日本大学法学部在学中にお笑いのライブ活動を開始。74年に出演したTBS「ぎんざNOW!」の「しろうとコメディアン道場」で5週連続勝ち抜き、初代チャンピオンとなり芸能界デビューを果たす。75年、桂三枝(現・6代目桂文枝)により「ラビット関根」の芸名に。83年、事務所の先輩の萩本欣一の指示で芸名を本名の関根勤に戻す。85年、タモリの「笑っていいとも!」にレギュラー出演を開始し全国区の知名度に。モノマネなどのバラエティー番組や舞台の傍ら、映画監督や日本アカデミー賞授賞式の司会なども務める。タレントの関根麻里は娘。